

The Riddle

1

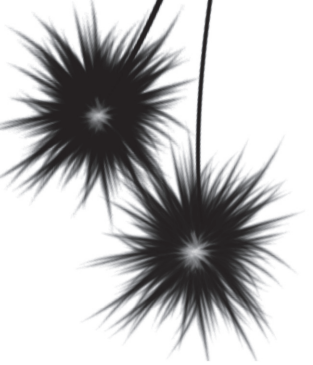
巻き込まれた方が悪いのか、巻き込んだ方が悪いのか。

まるで、歌でも歌い出したくなるような上天気だった。…と、い  
うか暑い。

「はああ…」

せつかくの晴れなのに散歩にも行けない、何故ならやる事が溜  
まっているから。

真冬の北半球はそれなりに寒い、雪だつて降る。日照時間は一  
年の中でも一番短くなるし、大気も濁りがちだ、だからこそ晴れの  
日は少しでも日光を浴びようと外に出る。いや、出たいと考える、  
普通はそうだよ、とツナはぶつくさ呟きながら執務室という名の勉  
強部屋に放り込まれている。有り難くないことにクリスマス休暇前  
のプレゼントは『宿題』と名のついた課題の数々だった。発音とア  
クセントに始まり活用、文法、リスニング。そして招待されたパー  
ティー用のマナーを頭に入れ、この課題を片付けなければ日本に帰  
れない。なにがプレゼントだよ、本気で嬉しくない、てゆうか、暑い。  
異常だよ、ここ…。



「暑い…」

したくない課題の山、目下大暴走中の空調、広い窓の外に朗ら  
かに降り注いでいる陽光、すべてがやる気をしばませてくれる。

「うー」

ツナが現在勉強中なのがイタリア語、なんでこんなことになつた  
かといえ、家庭教師の仕業に他ならない。

どうにか必要単位を取つて日本の高校を卒業したら勝手に語学学  
校に放り込まれていた。この春のことだ、卒業旅行がイタリアで実  
は留学先だなんて聞いてない。無理強いはいらないとか優しい笑顔を  
絶やさずにやつてくれる兄貴分と家庭教師だったと、今更後悔なん  
て遅いけれど、一応大学も受けたりしたのに。

「あーもー…」

頭を抱えるだけ無駄な日々は初めての冬を迎えていた。

考えても仕方がないと思つても目を落とした本には興味のな  
いことばかりが書いてある。日常会話、『私の兄弟を紹介します』だ  
なんてこんな挨拶、オレには必要ないだろ。語学学校理事主催のパー  
ティーだつてクラスので十分なんだから行きたくないし、十日後だ  
かとかくその日に来てもらいたくない。ていうか、生徒なのにな  
んで代表として招待されんだよ、と言つたところでリポーンが手を  
回したのに違いないし、ぶつくさと考えればそれだけの理由が想像  
もできて、結局物わりのよくなつてしまつたというか、ダメな自  
分にも腹が立つてそれもいやだ。

「難しいんだよ、この冠詞が」まんま八つ当たりだ。

何度目か分からない溜息がまた出る。

「喉かわいた、暑い……」

ほんと、どうしたんだろう。もうなんだか頭がぼんやりしてきた。渡された本の中に何故か一緒にあったチラシを団扇代わりにして首元に風を送る。政党の名前なのだと思う。理事のひとりか政治家だからで、女性問題が……あれ、違ったな。最近メディアによく出てきている。整った品のある顔立ちで、どんな写真であつても嫌みにならないくらいなのが一部の上院議員たちの反感を買っているのかなとかか。いや、もっと大事なことだ。議会でとんでもないことを言つたとかで、イタリアの政局などもとより、言語すら覚束無いツナには半分もその重大さが分からなかったけれども、とりあえず敵を大量に作つたらしい。ツナにも関わりがあるとリポーンは言つていたけど学校の理事だとすれば確かに小さいながらも関係はあることになる、個人的には皆無だけど、それとも違ふのだろうか。

「……」

ツナは息を吐くと天井を見上げる。室内の装飾は華美すぎることもなく色合いも落ち着いていて、必要最低限の物だけが在るべき任務を遂行するといったような重さで居座っている。ほとんどがアンティークなのだろう、まるで会社の重役が居るみたいな場所だ。学生らしくないよな、と眺める度に思う風景だつた。

イタリアに卒業旅行という名の強制留学に送られたツナはボンゴレ九代目が用意してくれた家で暮らしている。無骨な外観のセキユリティが厳しい寮のような建物で、個室は日本のそれよりも広く、清潔感もあり、場所は閑静な住宅街にあつた。近くには古い寺院もあつて、路地に入ろうものなら必ず迷つた。歴史ある建物と石畳の

多い、そんな街区だ。日本ではいかにもな旧家とか寺院で感じた匂いが漂つていて、最初は馴染みのない匂いの中に居て戸惑つたものだがこの季節までになつてやつと慣れた気がする。生活に慣れるとその土地の季節に馴染むということなのだと思つた。

「……なんだけどな」

タイムイングが悪いというか。

寒い階段といい、暗い廊下といい、古く丈夫そうではあるけれど、ツナが住むようになってからこれまでどころ特異な点は見あたらない。今も家庭教師のリポーンは当たり前前に、なんのかんの言つて獄寺と、山本も日本に帰らないでいて毎日はそのなりに静かで賑やかだつた。二人はツナと同じ学校に通いながら獄寺はもう一つ学校に通い、山本もディーノがトレーナーを紹介してくれて、野球から離れない生活を送っている。

ツナだけが純然たる語学留学生だつた。目標はアルバイトができるくらいまでで、現段階ではそれは果てしなく遠い。

「……」

日本に帰りたいのか、それともこの家から逃げて一人になりたいだけなのか。なるべく考えないようにしてはいるけれど。

「……のど、渴いたな」

夏みたいだ。溜息が出る。

「飲む？」

まず声が出た。近い。どこから落ちてきて、咄嗟に身構えるとがちゃんという乱暴な音とともに窓が割られ、ひらりとひとが乗り込んで来た。

「もつとも、僕の血だけだ」

ツナの真横ぎりぎりを過ぎて、冷たい外気を運んでくる。おまけにびたりとひとしずくが頬骨の辺りを打っていった。壊れた窓と警報、常夏のようになったこの部屋には有り難い風だが、…いや、どうだろう？

「つて、えええ？ ヒバリさん!？」

机の背後は窓で、だけど実は防弾ガラスだと聞いているし、自分分は窓を少しでも開けたりしたのだろうか。もう一つははめ殺しになっているから開けていなかった、何で聞こえたのかとそっちが気になるというか、怖い。

「血つて…怪我してますよ!？」

突然の登場にもだがその姿を見てぎよつとする、濃い色のスーツという出で立ちはいいとして、問題はいましも戦闘してきたといわんばかりの傷と汚れ具合だ。

「うるさいな」

警報は声高に邸内に鳴り響き、複数の足音と共に獄寺の怒鳴り声が聞こえてきた。曰く、うるせーな、何であの野郎が来るんだよ。ははは、ヒバリらしいな、山本はそれを笑って受け流している。

「ツナ!」

「十代目、お怪我は!」

「ちょ…、顔色悪いですよ、ヒバリさん!」

雲雀は無言ですたすと部屋中央のソファに進むとぼたりと横になる。

「これ、もつと壁側に寄せて」

「あの?」

見事にスルーだ。唐突さとこの物言い、行動のすべてが彼らしい。

「おいおい、大丈夫かよ。ヒバリ」

「だからだと血で十代目のお部屋を汚す気かよ、手前、医務室行けよ」口調は雑だがいちおう獄寺も気を遣っているのだと思う、手にデミタスカップとエスプレッソマシンがあるとしても。

ちなみに普通の住宅なので医務室などこの建物にはない、呼べばボンゴレの医療チームが駆けつけるとい有り難いのだがそうでないのだから、そういうシステムにはなっている。通常は山本、獄寺、リポーンにツナと、バジルとフウ大がほぼ毎日立ち替わりでやって来て食事や洗濯といったことはボンゴレが雇い入れたハウスキーパーが住み込みで行っていた。もはや寮か合宿所のようなもので、それでも護衛はついたが、さほどではないとツナは考えていた。

「あの、獄寺くん、ドクター呼んできてくれる? 俺も警報切ってもらうから。山本は…」残ってもらうつもりだった。

「おい、ツナ。ここ」

と、山本がポケットから携帯電話を取り出しながら頬の辺りを指す。携帯はちかちか点滅し着信を伝えている。

「え」

「悪い、ツナ。こつちでセキュリティの方もやつとくから」もしもし? 短く言って出て行く。

「今すぐお手当を」

獄寺が器用にポケットからハンカチを取り出した。用意が良いなあ、と一瞬感心するが、怪我なんてないよと慌てて手を振る。

「オレのじゃないから、気にしないで」

「ということは、この野郎のですか……」何が気に入らないのか、獄寺は不服そうな顔でソファを睨む。

「十代目、こんな奴ほっといいいですから」つか暑いつすね、この部屋。

自分で歩けるのだからいいだろう、とそんな調子で悠長に室内を歩いて雲雀の顔をまた嫌そうに覗く。勿論、コーヒーセットは持ったままだ。

「朝からなんだけど」いや、そうじゃなくて。

そう言えばツナも手にペンを握ったままだ、鳴りやまない警報にせかされるように慌てて机に放り投げる。

「じゃあオレ、ドクター呼んでくるから悪いけど獄寺くん、ヒバリさんの止血してもらえん？」

「いえ、すんません、すぐ行きます」早い。

ことごとテーブルにカップとエスプレッソマシンを置く。あ、ついでに空調も直しますから！廊下にそんな声を響かせながら獄寺は駆けていく。こくこくと顔くと警報は漸く止まって、代わりにふわりと濃いコーヒーの匂いが広がった。

獄寺と山本が出ていって、静けさを取り戻した部屋にあるのは香ばしい匂いを放つ器具と、ツナと雲雀だけだった、突発的な出来事というのは、現実感が少しだけ浮く。時計だけがあるべき秩序を取り戻したと言わんばかりに机の上で規則的な音を刻んでいた。使えそうなものをあさったりしたけど思うように動けない、なんだか今に取り残されたような気がしていた。

「……いいよ、別に」

「え？」

「コーヒーでも飲んでれば？」

頭から血を流している人間を目の前にして誰がコーヒーなんぞを囁れるというのだろう。よく分からないけれども雲雀はなんだか不機嫌で、何かのきっかけで愛用の武器であるトンファーを容赦なく振り回しそうに見えた。

「何言ってるんですか」

それはきつと調子が悪いからなのだろう。人間は血を流しすぎると死んでしまうのだ、ましてや瘦身のこの体躯だ、ツナよりは背もあるし、強くて身体も出来ているけど、どうしたって雲雀は細い。この人の中の血液量がひとより多いなどとも思えない。殆ど食べず、ろくに寝てもいず、貧血でも起こしかけていて、それで動けなくなつて、不機嫌になつている、多分そうだ。こういうところで雲雀は昔からとても鈍感だった。痛みを潔く受け入れないし、動けなくなるまで動く。

ツナはまず雲雀を見る。これ以上動く気はないらしくそれはほつとする。肘掛けの横に膝立ちになると小さい頭が投げ出されるように横に転がっていて、その顔色は白いといったらない。逆さまの眺めだと視線もそうぶつからないので雲雀の目をきつと見なくて済むだろう、なにせいま機嫌の悪い彼に咬み殺されるわけにはいかない。引き出しの中にあつた袋の布の部分を裂いた。

「触りますよ。痛いようなら言ってくた……」

「煩いな」

雲雀は懶げに突つ返すと寝るとばかりに目を閉じる。

「……」ええい、この人は。

ティッシュを折りたたんでこめかみに押し当てる。切れて、血が流れたまま臉から頬、顎を伝っていた。どこを突破してきたのか髪や肩、背中などが濡れてもいる。髪や眼を触るとひんやりしていて、呼吸すら薄そうで見えていてキツイ。どんなひとだなんて知っているのに、どれだけこのひとは血を流せば、この肌を傷つければ済むのかと、当たり前に見ていたことも蓄積されては麻痺するどころか逆に苦みに感じるようになっていた。

「……」なにこれ。

腕には切り傷と擦り傷、右腕の裂傷が非道い。しかも血はまだ乾いておらず見えている方が痛くなってくる。ぎゅつと縛り、血を拭いた。背もたれに手を置いてじつと視線を順におろしてゆけば左肩は一筋の掻き傷、右脇腹には何かが貫いたらしく、上着に穴が開いている。明らかな銃創、硝煙の匂いがする。

外でブレイキの音、ドアの開け閉めする音に続いてばらついた足音がする。

「鎖骨」出てる。

「はあ……」それどころではない。

オレのせいでしょうか、とつい喉元まで出掛かりそうになる。彼のことだから自惚れるなどか寝ぼけたこと言うなとかばつさりやってくれそうだけど、ツナの居場所をきつちり把握しているあたり、巻き込んでしまったという気持ちは強い。

「ここ」

とん、とそのとき思いがけず首の下を指で突かれた。ちょうど張り出した骨のくぼみの部分で、その冷たい感触がした瞬間、トンファー出たか？とひやりともした。

「あ、暑かったので」セーターを脱いで襟元を緩めたシャツ一枚になっていた。

「また瘦せた」

「……」そんなことないです、雲雀さんこそ。と、怖いような気がして言えない。

「ノド渴いてるんだろ？」

「……」忘れました。とも言えないし、いや視線は凄く感じるんだけどまともに顔を見られない。

「君、暑い暑いってうるさかったのに」え。

——がたん。

答えられずにいると視界の端でエスプレッソマシンが倒れて、琥珀の液体が零れていた。さっきよりも強く、濃く、コーヒーの香気がする。渴いた外気の風と、暴走し続ける空調が忘れていたはずの感覚を思い出させた。

「な、ヒバリさ……」

「こつちが聞いているんだよ」被せてくる。

威圧的な沈黙がぼたりと落ちた。喉がからからに渴いて、嫌な汗がにじみ出てくる。彼が足でテーブルを蹴つたのを多分、見た。

雲雀の右手が伸びてきた。

「飲まないの？」

「……っ、血は、飲み物じゃないです」からかわないでください。

「少しの水分と塩分で十分だろ？」

血のついた指のはらで頬を撫でる、細くて冷たい。分からないけど、雲雀は、こういうふうにして自分をからかう。

流れた血は、舐めると生ぬるくて、辛い。

「…っ…」

片手で頭を抱かれ、噛みつくように口を塞がれた。

「からかってないよ」

口唇の接触ひとつで容易く心臓を鷲掴みにする。

どきどきするからやめてほしい。

2

雲雀はボンゴレの医療チームが到着した後もまた治療中も寝ていた。木の葉一枚が落ちる音でも起きてしまうひとなのに、どこまでギリギリで動いていたんだと思うとなんとというか、言葉がでない。どこからそんな力が出ているのか本当に知りたい。

彼の部下である草壁との連絡は思うように取れなくて、いまはゲストルームに寝ているけれど、あのひとは起きたらまた動くんだろう、忙しいらしいし。

「壊滅したらしい」

「…は？」

ロボーンの一言に首を傾げる。

家のリビングは多目的のルームとして機能する。ジャンニーニにバ

ジル、ボンゴレ本部から二人の男女が、まるで遊びに来た夫婦と友人そのものという出で立ちでやって来た。特にバジルとジャンニーニは警報の音が伝わりと同時に部下達とともにこちらに向かったらしく、その機動力にツナは思わず頭を下げていた。医療班と夫婦を装った本部の二人はほぼ同時で、当たり前かも知れないけどたぶん、どこの国の警察よりも迅速でかつ、何一つ無駄がなかった。やっぱりマフィアは並じゃない、ツナが知らないだけで組織は絶えず情報を得、的確に判断し、よどみなく機能しているのだ。

二人は必要と思われる機材の搬入と、諜報部からの連絡を伝えて帰り、バジルたちだけが残ってロボーン達と話していた。ツナは『宿題』のためにリビングを追い出され、ほんの数分前にこちらに呼び出されたばかりだった。とはいえ、テキストをにらんでも考えるのは雲雀のことだとか、雲雀のことだとか、ロボーン達の話とかでちつとも進まなかったのだが。

「ヒバリだな」

「ひ？」

読めない。

バジルが丁寧に教えてくれる。ボンゴレにちょっかいを出していた新興のファミリィが壊滅したこと、そこは主に密造兵器の売買取扱っていたこと、ボンゴレに手を出したのは恐らくリングと匣狙いで、改造型のそれを軍に売りつけるつもりだったのだからと続けた。

「壊滅って…」そんなことさらつと言うなよ…。

慣れたくもない台詞だがファミリィの離散は想像だけでも釣りが